

〈資料〉

架蔵『酒餅軍記』翻刻

伊 藤 慎 吾

『酒餅軍記』は酒田造酒之丞吞吉を大将とする酒の軍勢と大仏鏡の次郎練餅を大将とする餅の軍勢とが合戦するも、飯の判官種元の仲裁によって和睦に至るという異類合戦物の一つである。酒田造酒之丞、大仏鏡の次郎、飯の判官の三人の名から明らかなように、元禄頃の刊行になる『酒餅論』と極めて密接な関係がある。本文を比較するに、ほぼ同文であるところから、『酒

餅論』の異本として位置付けられるものである。

『酒餅論』の後世への影響は大きく、特に黄表紙への展開については畑有紀による詳細な論がある⁽¹⁾。『酒餅軍記』についてはすでに津市立図書館所蔵明和四年（一七六七）写本が知られている⁽²⁾。該本を調査した際、一八世紀半ばの写本であること、『酒餅論』に酷似することから、『酒餅論』版本の後続作品だろ

うという印象を受け、しかも巻頭の約一丁分が欠落していたので、詳細に検討することを見送った。

ところが最近、幕末期の写本ではあるが、本文が完全に残っている伝本が見出された。そこで改めて本文を通読したところ、『酒餅軍記』を『酒餅論』の改作本として処理するには些か疑問が残ると思に至った。詳細は後考に譲ることとして、まずはその前提として本文を翻刻公開することとした。

図1 巻頭部分

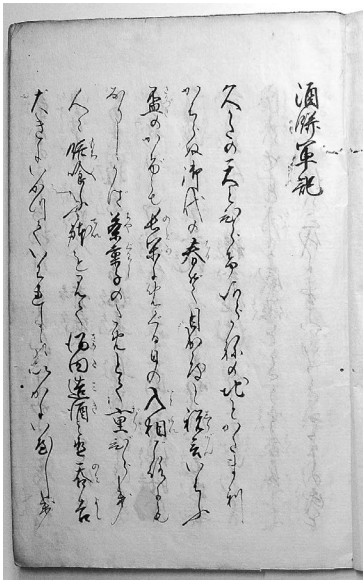
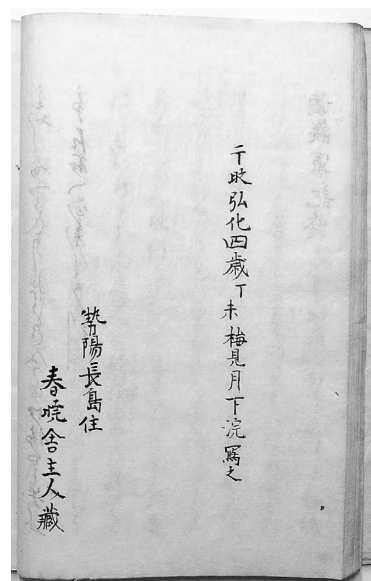


図2 巻末部分



【略解題】

書型 仮綴 写一冊。たて二四・八×よこ一七・〇

センチ（表紙）

料紙 楮紙

表紙 共紙表紙（原装）・渋引（後補）

外題 後補題簽「酒餅軍記・他七編・酒禁伊呂波歌

酒旨請證本 鉄斎旧蔵本」（ペン書・左肩）

内題 酒餅軍記

尾題 酒餅軍記^終

丁数 一九丁

行数 八行

本文 漢字仮名交じり文

奥書 最終丁ウラに本文と同筆で次のように記す。

弘化四年（一八四七）の書写奥書と春曉舎主人所蔵の記は同筆。

于時弘化四歳^{丁未}梅見月下浣寫之

勢陽長島住

春曉舎主人藏

印記 なし

備考 『酒餅軍記』は次の七つの短編とともに収録

されている。目録丁に「巻中目次」とあるので、何人かが上中下三巻からなる文集を編纂し、中巻の第一編にこれを収めたのであろう。

禁酒伊呂波歌（〈下戸上戸〉伊呂波哥）

丁未（弘化四年カ） 松栄楼琴車

酒旨請證文

乱酒三献菊月二日酔 笹尾喰人

章魚の記

強圀協洽（弘化四年カ） 花王軒主人

加藤侯之八字ノ賛

丁未（弘化四年カ） 桃華堂藏書

儉約御觸書写

天保十四年（一八四三） 稔・弘化第四歳

伊勢長島 堀双枕斎主人

六字丸功能書（念佛寿妙六字丸功能書）

丁未（弘化四年カ） 醉中庵主

彈左衛門一件聞書

弘化四歳 松栄楼北窓写・白雲主人

所蔵者 伊藤慎吾

注

- (1) 畑有紀「『酒餅論』と江戸中後期の物産―江戸への下り酒をめぐる―」（『論集 日韓学術交流会』一、二〇一四年）、同「江戸後期『酒餅論』作品とその社会」（『軍記と語り物』五三、二〇一七年）。
- (2) 伊藤慎吾「近世―近代前期の異類合戦物の文芸における嗜好品の受容」『二〇二二年度 公益財

団法人たばこ総合研究センター 助成研究報告
(二〇一三年)。

【翻刻】

〈凡例〉

- 一、表記、改行等はなるべく原文に従う。
- 一、改行は半葉ごとに文末に「へ」で、また丁の表／裏は「オ／ウ」で示す。
- 一、本文中の語句の左に注記が散見される。それはルビ「左／〇〇」として示すか、もしくは該当語句左下に「左／〇〇」と小文字で示す。
 例 Ⅱ 左／葉立 つきたて 焼餅_{左／焼討} やきもち
- 一、三丁ウラ五行目の「しらぬ」はミセケチと判断される。

〈翻刻〉

酒餅軍記

久かたの天とひらけあらかねの地とかたまり

かはらぬ御代の春ぞ目出度し祝言いはふ
 盃さかずきのかけも長閑のどかにめぐる日の入相いりあいごろにも
 なりしかば茶菓子ちやくしのためとて重おもひらき
 人々餅喰もちくふ躰ていを見て酒田造酒之丞さかたみき呑吉のみよし
 大きにいかつていわれしはいかにいやしき
 茶屋ちややのもち物をかたらんたしかにきけ我
 御座敷へ罷出人まかりいでに賞翫しょうくはんせられしを何ぞ
 おのれが推参すいさんし御酒宴しゆゑんの興けふをさますは
 尾籠びろうなりア、去さながらことわりよ我俗姓わがそくしやうを
 しらずして無礼ふれいをなすかしからずば元来無
 智ちぐの愚ぐにんにて禮義作法れいぎさほふもしらざるかいでく
 さらばそれがしが威徳いとくをかたり聞きかすべし
 そもく酒は三代に事おこりて天下の民たみを
 養やしなふゆゑなりされば漢の高祖かうその御代みよに
 劉石りうせきといへる民の子継母けいぼのあたへし毒どくの飯喰めじくふ
 まねをしておのが屋の軒端のきばの下に捨すてければ
 自然しぜんと雨露うろのかゝりつゝ甘露かんろにこそは成なにけり
 かゝる處ところに不思議ふしぎやな天下一同みなひとに早魃かんぼつし
 水一滴みづひとしずくもなかりけり元より帝賢王みかどけんわうにて民の
 なげきを救すくはんと天に祈誓きせいをかけ給へど

「一ウ

「一オ

さらに小雨も降らざりけりさるふし儀や
水鳥の何国ともなく飛来り劉石が園に
羽を休む。劉石不思議におもひつゝ、急ぎ立出
見てあれば水まんぐとたゝへたり、則是を
汲取て飲ば甘露もかくやらんこゝろもはれ
やかに飛立ばかりにおほへつゝ、則是を汲取て
帝へ捧げ奉れば帝をはじめ奉り太子后や
其外の宮女月卿雲客まで是をきこし
めさるゝに老たるは若くなり若きはいつも老も
せず目出度ためしなりければ万民までに
下されけりさるによつて今の世までも毒藥
變じて藥となるとは此時より申とかや
かくて劉石を一国の主任に給ひける其年
すなはち癸酉年にて有しゆへ酒といふ文
字をさんずいに日よみの酉とかゝせたりかゝる
芽出たき酒なれば神の前にて御神酒と
いひ佛の前にて甘露といふ貴人高位の
前にては諫むと名付晋の七賢虎溪の三笑
の樂しみけるも酒ぞかし尤醫道に百藥の
長とほめたる事なれば酒を用ゆる其人は

「二オ

「二ウ

「三オ

利根才覚智恵ふかく鄙ひなのすまいもおのづから
 こゝろは花の都ぞや行衛ゆくへもしらぬ知らぬ旅人たび
 馴るゝも酒の威徳ぞや先初春まはるのあしたには
 子の日の松の千代かけて取傳とりつたへたる弓始ゆみはじめ
 万歳樂まんざいらくと謡初弥生うたいぞめやよひは桃花端午とうくわたんごには菖蒲しやうふの
 酒さけや七夕しちせきは星ほしを祭りて八朔はつさくは田面たのもの鴈かりの
 初祝はついはひ扱十五夜さては明月めいげつの千里ちさとの外ぐもも曇り
 なくあたらし酒を汲内くむうちに重陽ちやうやうの日ひに成ぬれば
 目出たき事を菊きくの酒龍さけりやうにひかるゝ玉水たまみづの
 手まづさへぎる袖そでふれて舞まひつうたひつす
 るぞかし寒さむき夜雪よゆきのあしたには暖あためざけ酒を
 引うけて吞のめば寒氣かんきをふせぐ也古人こじんも
 林間りんかんに酒さけを暖あためて紅葉かうようを焼たくといはれたり
 酒商賣さけしうばいの富貴ふうきならぬ人もなしふるき昔むかしを
 尋ぬるに唐土もうこしにかう風ふうといへる者潯陽しんやうの江えにて
 酒を賣海中うりかいちゆうの猩々せうぐに泉いづみを授り富貴ふうきとなりし
 ためしもあり富る斗とめりに限らずして武家ぶけ
 にも又徳とくぞある源みなもとの頼光よりみつは三社の神かみより酒を
 得て大江山おへやまの鬼神きしんをたばかり討うちたいらげし
 ためしも有何もぞや餅もちめが分ぶんとして

我等に肩をならべんやさればこそあれ
現在にて地獄を感じ白杵にて突くだかれ
て活々と唱ふる文の下よりも又よみがゑり一身
の餅とは見れど分々にひねり切れて
豆の粉や小豆の中へ打こまれせまき食籠
重箱やふち高などに押入れ枚よふじの
先にかけ鬼一口に入られてみぢんに成て
失るも有又は雑煮汁粉とて熱湯地獄に
落るもあり紅蓮大紅蓮の水の餅となるも
あり炎の中へくべられて焼餅となりけるを
おのれが身の因果の程は知らずして頬を
はらすぞおろかなれやア悪餅めとのゝしりけり
時に大佛鏡ノ次郎ねれ餅此由を聞しめし
アラ事おかしき廣言やなされば水鳥の
水に浮める月ふめばいやしきものは上をおそ
れずとよくも申傳へたり古人の詩にいはく
山頭の月は雲門の餅を掛け屋後の松は
趙州の茶を煎と月にたとへし我ぞかし
酒といふ文字は水鳥にて上を恐れぬ愚さよ
おのが身の上自讃して人の威徳はよもあらじ

「四ウ

「五オ

「五ウ

夫餅それもちといつは天地開闢てんちかいびやくのいにしへ天神七代
 地神五代の御傳也七代目伊弉諾伊弉冉いざなぎいざなみの両
 尊みこと大日本淡路國あわじのくにに下り始めて夫婦婚合いごくわうし
 給ふ則一女三男を出生し給ふ扱又天の逆あまたさか
 鉾ほこにて國もやあると海原をかきさがし
 見給へばひとつの物ぞさわりける是を引上ゲ
 給ふ時鉾ほこのしたゝりかたまり大日本と成なりけり
 是を表ひょうして白杵うすきねに用ひて備へ物となす
 されば神の御心は曇くもらぬ鏡かぐみのごとしとて
 餅を鏡と名付たり先青陽せいやうのあしたには
 貴方きはうに向ひ年神の用ひも杵きねがなす業わざとて
 袖打そでうちふれるかちんのきぬかへすくも面白おもしろや
 目出度事めでたきことはじまりとかや扱又床とこに
 かざる輪取わどりのもちやしんの餅手がけにも
 また丸雪餅七種粥あられもちなぐさかゆや小豆粥あづきがゆの中に柱はしらと
 立身たちみなり増りて堅かたき具足の餅月待日待もちつきまちひまち
 の備そなへもち弥やよひはひなの遊びとて蓬よもぎの
 もちや端午たんごには粽ちまきのもちや柏餅水無月かしわもちみなづき
 はじめの水餅嘉祥こみゆかんの餅や盃蘭盆うらぼんには亡魂なきたま
 祭まつる餅團子田母もちだんごの鴈かりの祝いはひとて名主庄なぬし

屋はいふまでもなし脇百姓や水呑まで餅
 をつかぬはなかりけり法華の開山日蓮の首繼
 のもち十月の御影講にも色々の餅猪の子の
 餅や極月の川ひたり餅祝言には五百八十不祝言
 には四拾九のもち善事惡事^二も用ひらるゝは
 我ぞかし其ことわりも知らざりし愚痴の
 罪にや今生より黄なる泉に落^ち入^りて桐兒や
 わきや働^{はたら}きの男といへる鬼どもにゑふり貝^二
 こねまわされ身をばかすかにしほり酒ぶつめく
 甲斐もあらざればまた或時はあげ舟のせま
 き地獄におし入られメ木掛石の難にあひ
 流るゝ色は血の涙梵網經には盃も壺度手^ニ
 取る輩は五百生が其間手なきものと生るゝ
 よし説れたり実も惡趣に墮すべきは
 酔たる時は氣を亂し貴人高家も憚らず
 咎なき人を惡口し泥土不淨へ倒れ伏し
 無病の人も病者となし可惜菩薩をくさらかし
 世間費の酒めをば其俣おきて何かせん
 汲干捨んと^ての給ひて一文餅の事なれば
 しのびゝに觸^ふられける御一門の其中に餡餅と

「七オ

「七ウ

「八オ

見へし人す、み出て申やう軍は大事の
 物なれば兵具なくてはかなふまじ先餅たて
 を拵らへ臼井峠につきたて砂糖殿を大将として
 備へを堅く守るべしと小豆餅が筆取にて
 早着到をぞ付られける先惣大将は大佛鏡ノ
 次郎煉餅相隨ふ面くは阿部川の砂糖餅胡麻餅
 桑餅鯨餅牡丹餅店屋のさつさ餅新坂の蕨餅
 忍び入て敵の城を焼餅にせんと思ひしに
 案に相違しさとられて早軍法ニ事かき餅
 とは深草や鶉もち軍乱れてさんきもち
 真たゞ中を栗粉餅数万の敵を宇津の屋の
 唐園子殿こゝに又光源氏の多田満仲はあん
 の有大将にて我餅口左持口に蒸籠あげ敵遅し
 と待給ふ金龍山にはあられども戻りが空
 抜か米饅頭臆病神にひかれつ、寒むくば
 着せん呉服餅大ちからなる朝比奈餅甲斐ぐ
 敷も小豆粥奈良茶引とも先か、れ弓を
 煎豆いり米は雨丸雪餅といはるべし
 扱麵類の長詮儀延々にして温鈍花なり
 蕎麦切立られいかゞせん素麵到なる事は

「九才

「八ウ

「九ウ

いや敵切麦こそおもしろけれと慥貪さふにぞ
 見へにける干菓子ひぐわしの面きつた聞傳へ餅の陣ちんをぞ
 みつがんとて馳来る其中に伊保の金平糖こんぺいとう
 緑の色は藤のみどの大坂には地黄煎花を
 はらすや桜飴人に面を更科のまがきをまもる
 求肥飴咲やこゝろは丈長し羊羹ようかん
 見給へや自ら手をおろさずとも何とて方便どうめうじ
 あるへい糖あらまほしいといふ所に道明寺なる
 人々に砂糖煎餅さとお豆さとう柏を先にかしわ
 かゝるなら五斤や七斤は落鷹なりと廣言し
 急ぎ軍を正林糖とて長刀をりうくと
 振廻し山林にひかへたる雑兵のかすていら与
 五平がきみだんごひゑだんこの奴原を醒が井さめ
 の宿にかくし置雨のふる夜は油断すな
 自然の事もあるならばたがひニよもや
 おこし米と約束し静まりかへつて居たりけり
 かゝりける所に軍このみの菓子達此一乱聞傳へ
 各御所柿の御前に参り此度の大乱よそに
 左みかんもいかなり柚柑ゆかんとのおぼしめ歩ならば
 柑子ぬさきに出給へ御供せんとす、むれば

「一〇オ

「一〇ウ

天晴紀伊あつはきいの曲くせものかな其儀にて有ならば
 蜜柑太郎みかんたろう実さね有金柑ありきんかんつふりの九年母軍奉
 行ぎやう仕ぜれと下知げじあれば各おの黄糸はうきの腹卷はらまきし
 て冬春ふゆはるかけての軍いくさこそ我らが望のぞむ所
 にていさみすゝんで出られしは苦々にくしく敷も
 きこへける又六十にあまれる柿かきの実盛さねもりは
 髭ひげこそ墨すみにて染そめにけり実に洪柿しふかきとあらそひて
 先懸さきかけせんもおとなげなし又天干熟柿あまほしじゆくしと
 あなどられんも口おしとおもふこゝろぞ
 やさしけれ扱わか若武者わしやは無二無三むにむさん向むかふ敵かたきを
 妙みやう丹割たんわりうろたゆるをば生捕いけどりてつるし
 柿がきにもこゝろがけ立石たていしぬまたの一黨いっとうは
 竹馬たけうまに打乗うちり梶原かづはらがゑびらの梅花ばいけわをちら
 して見せんとて真先にすゝみしを父ちちの
 豊後梅ぶんごうめいにしへの花はなのすがたはちり失うせて
 皴打しはよれる梅法師うめほうしにて有けるが鎧よろひの袖そでを
 ひかへつゝ犬死いぬじにすなよ青梅実あをうめざねよき鎧よろひを着き
 たりとも透間すきまを射いらるゝ事もあり
 とて唾つばをためて異見いけんする情づらく是あんを案
 ずるにすもゝたつかたなりければ百度もゝたひまけ負

て老^{ひと}度^{たひ}の誠^{まこと}のかち栗^{くり}をこゝろがけ教訓^{きやうくん}

したる武道^{ぶどう}の程^{ほど}奥^{おく}ゆかしくぞ見^みへニける

山^{やま}も、の一^{いつ}黨^{とう}は楊梅^{やうばい}皮^ひの鎧^{よろい}着^きて九寸五分^{きゅうすんごふ}の

鎧^{よろい}通^とし左^{ひだり}手^ての脇^{わき}にぞさし枇^び杷^ばの木^きの棒^{ぼう}を

さき隣^{りん}國^{こく}にかくれなき兵^{つはもの}なればあたりを

拂^{はら}て出^いにけり美濃^{みの}國^{くに}の住^ま人^{ひと}真桑^{まかつり}瓜^{あまざね}甘^{かん}実^{じつ}御^ご一

門^{かど}の人々^{ひとら}ニは府中^{ふちゅう}新田^{しんてん}鳴子^{なるこ}瓜^{うり}ぶしつけなれや

遍^{へん}の町^{まち}どの水^{みづ}瓜^{うり}無^な果^{くわい}花^{いちじく}荔枝^{れいし}枝^えまで不^ふレ残^{ざん}御^ご

供^きと聞^きへけり扱^く栗^{くり}う左^{ひだり}栗^{くり}生^{なま}椎^{しめ}の塚^{づか}左^{ひだり}左^{ひだり}篠^{しの}塚^{づか}一^{いつ}黨^{とう}母^{はは}左^{ひだり}一^{いつ}期^{こう}の浮^う沈^{しん}

こゝなりと思^{おも}ひ定^{さだ}めて出^でらるゝ青^{あを}梨^{なし}九^{きゅう}郎^{りやう}有^{あり}

実^{じつ}は餅^{もち}の陣^{ちん}をや見^み繼^{つが}ん酒^{さけ}吞^の方^みやせな

まじと胸^{むね}をひやして扣^{ひか}へたり酒^{さか}田^た壺^{たい}斗^と左^{ひだり}一^{いつ}黨^{とう}

聞^き傳^{でん}へ業^{ぎやう}々^々敷^し餅^{もち}共^{ども}有^{あり}様^{よう}や何^{なん}程^{てい}の事^{こと}か

仕^し出^でさん去^きながら小^{しょう}敵^{てき}を見^みてあなどるな大^{だい}

敵^{てき}にも恐^{おそ}るゝなど言^い傳^{でん}へたる事^{こと}なれば油^ゆ断^{だん}

してはかなふまじ急^{いそ}ぎ勢^{せい}を催^{もよほ}して

逆^{さか}寄^よせんとの給^{たま}ひて催^{さい}促^{そく}廻^{まは}し勢^{せい}ぞろへ

早^{はや}着^{ちやく}到^{たう}をぞ付^つけらるゝ先^{せん}南^{なん}都^との諸^{しよ}白^{はく}どの

桶^{おけ}川^{がは}胴^{どう}の鎧^{よろい}を着^きし糟^{かす}毛^げ馬^ばに德^{とく}利^りとめし

軍^{ぐん}配^{はい}柄^{へい}杓^{しやく}おつとりのべ樽^{たる}井^いの宿^{しゆく}に陣^{ちん}取^{どり}し

「一二オ

「一二ウ

「一二オ

軍神に神酒を備へ、盃の指物武蔵野の

馬印をおし立味方の人々に打向ひしき

だいして曰運は天目にありたとへ死すとも

上戸と思へしゐて吞死もこゝろがけ不覺を

とるなかたゞよとさもいさぎよくの給へば

御一門の其中に軍鶴の池左軍功ノ智有人とおほしくて

酒林のかげちんくちろりと出て申さるゝは

何ほどの事か候べき軍さ餅は只一口の勝負

にてこそ候はんと事もなげに申つゝさも

大様に扣へたり扱国々の名酒達若狭小濱の

諸白や薩摩に粟盛琉球酒博多の煉酒

摂津には和泉池田に清水酒伊豆の江川に

菊酒や手いたき軍丸雪酒味方の理運に

なるならば世に榮々と澄左酒とうるし酒には

おもへども少しこゝろは濁酒こもる白左城酒油断

して敵に火の手をあげざけにせられて

後悔せんもなし智恵浅じ酒と笑わるゝな

こゝろも猛き葡萄左武道酒仁義の勇ある忍冬酒

味淋酒漿酎長君酒其外名有薬酒御ころく

せんだりまとうぎそわかと七遍となへ此軍に

「一三ウ

「一四オ

かたせてたべ南無薬師瑠璃光如来と祈る

「一四ウ

こゝろは甘酒とわらはぬものはなかりけり肴の

一族聞傳へいざや酒に加勢せんとて先肴の

鯛將と見へし濱焼。鯛の寿し平目の釜鉾

横たへて向はゝいか成敵なりとも幡城やがて

巻するめ玉子のふわ／＼ふわつきて鰻たて

られ蒲焼に白魚せらるゝな鯛へ鰻とて田夫

野人の田作りまで引連濱目に立廻る軍勢の

其中にたれあらふ四國の鯧魚北国に聞へたる

干蛤干鰯西国には薩摩に煎海鼠五嶋の鰻串

海鼠からすみ置鰯堺の鯢備前の海鼠腸おな

じく醬蝦岐早年魚のすし房州の鯖の脊腸

や小田原の鰹のたゝき新井の鳥柏漬鮑伊

勢の熨斗鮑伊豆の栄螺芝雑魚能登の鯖

越後の鮭塩引桑名の蛤蛎蛎等にいたるまで

かさにかゝつて一合戦吸物とこそ聞へけり進み

出たる其中に嶋海老の独武者皆緋おどしの

鎧着てあつはれ勝れて見へにけりつばさの

一族たれ／＼ぞ去は候某は五位のくらいを給り

て五位鷲と名乗候相隨ふ面々は青鷲鶴

「一五ウ

「一五ウ

鷺せゝり鷺岩鷺ひらさぎ召連れたり鶴は
 一踏にせんとて白鳥共にひかへたり鴈は
 一羽の勝負なりとて鴨の類族召連れたり
 鵠は槍にもおとるまじ只一つきに突抜
 んと大様にひかへたり山鳥野鷄鳴鶉春
 雀鵲に至るまで不殘こそは出にけりおそなはり
 候へども我等も後陣仕らん先手の陣勢つよら
 せんと鞍馬午房申やう手先にすゝむ矢を
 落花みぢんにたゝき午房豆腐の田楽煮
 染の麴青海苔甘海苔笠井海苔品川海苔
 や浅草の里わかめ相良布ところてん干瓢
 ゆばや嫁がはぎほうれん草やみつ葉芹独活
 やわらびに款冬花干大根のはりくまで
 我おとらじと出られけり時をうつさず餅の陣
 より行器を吹ば太鼓樽を打立けり
 餅の陣いちめき立て餅筒餅槍追取延れば
 酒の陣より酒具足を着し酒槍をかまへつゝ
 両陣たがひ入乱れ軍は花鯉をちらしけり
 あるひは首をかき餅やひつきり餅に呑切
 や糸切つまみ切しんこねち目をおどろかす

ところも有又汲取るもの有さいつさ、れつ
 さしちがへてたをれ伏てねるもあり大盃より
 流れ落置の縁をくぐるもあり板敷山へ逃る
 ことあり物によくくたふれば和田酒盛や
 高館や名残おしみの酒盛も是にはいかで
 まさるべき天晴酒餅のあらそひけふも限りと
 見へにけり軍半の事なる二飯の判官種元
 は朱腕の鎧に四つかさの甲を着し白箸の
 折敷に御身かろげに飯^{めし}給ひ相隨ふ郎等^二は
 本汁二汁煮物殿鯉の差身料理鱒あへて
 もつて人に知られし斎藤別當皿盛大根の
 剛のものの前後左右に召連兩陣の間に
 かけふさがり大音聲に宣ふやういかにかた
 がた既に古語にも酒は量りなけれとも
 乱に及ばすところきゝつるに俱に一鉢の菩薩
 にて黒衣をぬぎて白米とあらわれ給ふ
 和光の影瞋恚のけふりに曇らし修羅の
 眷属となり給はんはおろかなりひらに和睦
 し給へとしきりに異見ありければ酒餅の両将
 聞し召此上はちからなし実にも飯の判官は

「一七オ

「一七ウ

「一八オ

諸食^{しよじく}の大将なりければそむき申てあしかりなん
 左あらば和睦^{わぼく}さんと互にいかりをしづめ
 つゝ目出度中と成給へば新酒^{しんしゅ}楽には額^{ひたひ}を
 など万八楽には砂鉢^{さはち}で呑^{のむ}あん入のまんぢう
 さつさ餅喰ふてたのしむ相生の下戸も上戸
 もおしなへてよしなき今の口論やと笑ふ
 て左右へひきにけり

「一八ウ

酒餅軍記^終

「一九オ

于時弘化四歲^{丁未}梅見月下浣寫之

勢陽長島住

春曉舎主人藏

「一九ウ

